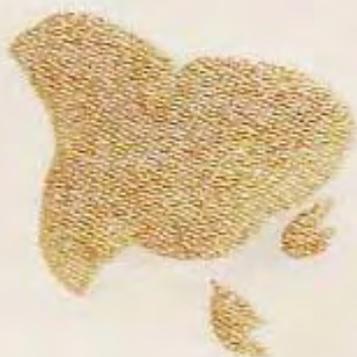


# 京鹿子

昭和二十三年九月二日第三種郵便物認可  
平成十八年六月一日發行  
通巻九八二号、毎月一回一日發行



6月号

実万両  
丸山佳子



小鳥引く離愁は人にのみありて  
お日様に芽柳甘えすぎてゐる  
杉花粉拂ひ給へと大師坂  
雪柳幹のどこからこの浄白



掌中の玉にはなれぬ実万両  
青き踏み叱り上手に犬をつれ  
一蝶がホームレスの仔細見てゆけり  
まばたかぬ鳩の目八十八夜来る  
蛇穴を及ばずながら智恵を貸そ  
つばめとは毎日一期一会かな



豊 田 都 峰

清響集 その六十二

雪嶺へ万物透くるより外なし

花三分さそひに風のあそびだす

花さくやひとしほ信づることふやさむ

またもやふものをふやして夕ざくら

筆おこすあたりにともる夕ざくら

まつさきに夕色にしむ山ざくら



花ざかり同じぶんだけ裏とかげ  
日をひとつほりあげてゐる花曇  
おかげさまとまをせばみ寺花あかり  
ひともとのみやまざくらは女院陵  
公案を解かんとのだかな端に座し  
うららかと言つては禪定に遠くゐる  
奥宇治の野の香とわらび餅とどく  
接木せむかなしきことをふやすやも

## 秀華採集

文机は亡母の身丈に梅匂ふ

荒川美邦

季語「梅匂ふ」は必然性といつてもいいぐらいにたいへん働いている。上中十二音にはどんな季語でもつくが、これを選んだことを手柄とする。母へのこのうえない贈り物である。

深海のあぶくぼつりと竜の玉

井潟ミヨ

春浅し海の音させ貝洗ふ

西村摩耶子

ともに海にかかわったが、前句の連想はまさしく宝石的だし、後句の連想も「春浅し」と響き合って効果を出している。比喩や連想は俳句表現の大切な部分である。

鈴鹿 仁

森 五月

森五月やすらぎを知る無音界  
夏立ちて噂の通す勝手口  
白鳥の白きらめきて聖五月  
からくりの無暗の闇にある暮春  
通し鳩器用に生きて堂の距離  
橋ひとつ湖を跨ぎて夏めかす  
通し鴨ひたすら眠る湖国呆け

近 詠

宇都宮滴水

さへづり

四ん月の四は軽ろがると遊び癖  
石放ち乱数の蝌蚪あわてさす  
穴を出て久しき人の貌伺ふ  
葉ざくらの前とうしろにある翳り  
芽柳のあらそひ裁く風となり  
落椿けふもことなく空仰ぐ  
さへづりや隙間うづめて隙つくる

# 神麓集



鳥雲に米の凶書館伊能大凶  
 忠敬ら通りし徑につつじ燃ゆ  
 伊能図の正本鳥有春の闇  
 幻の地凶山積みに山笑ふ  
 忠敬の業績燦と風光る

頃 日 北村 香朗

確定申告手間どりし果て北風に遭ふ  
 銀盤の妙技につづく投げキッス  
 春暁や五輪の金に日本湧く  
 長壽眉とひとり諾う春鏡  
 羽搏きは椿の蜜にかも知れぬ

日毎朝毎 丸山 冬鳳

春の雪全館チャイムの朝食刻  
 春の雪館内傘壽の「誕生会」  
 雛飾り日毎朝毎笑みの綺羅  
 冠りの乱れも五人灘子雛  
 日向ぼこ友ぬて一人耳遠し

奥宮の千木のなとお奥春告鳥  
 国栖奏の鈴の中から鸞のこ糸  
 切れ深き円空の笑み春の塵  
 青き踏む野の点景に道祖神  
 風の綾日の綾紡ぎはるのゆき

山田 耕子

月冴えて見送る駅の天の川  
 谷底は瀬音が月に鳴るばかり  
 手を振つて見送る母や月しぐれ  
 月暗く橋よりのぞむ蛇谷川  
 村はづれ道はこぐらき一人旅

吉田 多美

らふ梅や喪中の家に病む女  
 諍ひも母子の仲や春の雪  
 雪ぬいで目尻を下げし道祖神  
 石疊曲れば京の春に逢ふ  
 森芽吹き鳥のドラマの生まれり

# 神麓集



石人に動き初めたるさくらの芽  
寒戻りたる石人に朱がのこり  
古墳圏葉牡丹渦を解きはじむ  
石棺に親子がありて地虫出づ  
草摺りの七重遅日の石人に

角 直指

上昇気流今つかまへて鶴帰る  
桜餅食ふ笑ひ皺深くしてお  
お松明嵯峨のお多福面も買ひ  
焚火の輪あの名優の名が出てこない  
春の雪足の跡よりにじみ溶け

丹生をだまき

念仏酒 禰寝 瓶史  
野風呂忌の赤穂潮の夕映えて  
白魚に念仏酒を呻りけり  
箱河豚の艶姿の若布袖にして  
吃水線保つ沖雲鳥帰る  
動物園不協和音の寒戻る

街 伊藤 希眸  
街路樹のさくらの遅速過去知らず  
柳風ピエロの踊る街ぎんざ  
象の瞑想四月の街へ子ら駆ける  
銀杏若葉街道の空つき抜ける  
山吹の黄の風からむ温泉街

お水取り 奥村 鷹尾  
水取りや初参籠の童顔僧  
行衆の御坊に菓子箱提げ見舞ふ  
水取りやがしつと投地の膝を打つ  
籠 松明 一墓 一僧 上堂 すす  
修二会終ふ満行僧の孫を抱き

高橋 千美  
出土片つなぎ一壺となるうらら  
麦踏みのみ残したる近江富士  
鳥雲に勾玉の知る墳の主  
出土壺どれも春寒まとひをり  
また一枚埋めらるる田や亀の鳴く



# 京鹿子集

## 豊田都峰選

去年今年もつばら脚立の押へ役

枯蟪螂飛んで烏となる夢の

臆たけて双鶴の羽差し交はず

文机は亡母の身丈に梅匂ふ

貝合せの貝に罅入る歳月よ

暮色いま梅の輪郭包みそむ

春浅し海の音させ貝洗ふ

追はれたる鬼の孤独や節の豆

着水の音齒ぎれよし番ひ鴨

ついでみて体重ほどの雪こぼし

水かげろふ橋上の声にからみけり

城陽 荒川 美邦

亀岡 西村摩耶子

京都 井瀉 ミヨ

大寺をひと巡りせり草の餅  
ポケツトのおせんにキヤラメル草萌ゆる

深海のあぶくぼつりと竜の玉

春の雨正面通りを真直ぐに

御懷妊の報せある日の冬牡丹

冬耕の十坪なかなか抗へる

機影過ぐたびに薄るる冬桜

かの山をまた懐かしむ冬桜

啓蟄やフアーブル昆虫館開く

梟の瞳目の森薄日さす

指笛は神々の韻樹々芽吹く

千葉 河内 桜人

伊藤 希眸